

第一卷『図説日本の児童書四〇〇年』はじめに

川戸 道昭

以前から疑問に思っていたのだが、日本には、どうして、児童文学や児童書の歴史を一覧できる通史がないのだろうか。たとえば、近代児童文学史と銘打った書物をひもとくと、その起点は、明治初年から一〇年代あたりにおかれ、それ以前は児童文学の空白期とみなすのが一般的となっている。もう一方の近世児童書史を開くと、反対に、幕末から明治二〇年あたりが終点とされ、それ以降は完全に対象外となっているのが通例である。しかし、本当にそうなのだろうか。日本の児童書は、明治初年から一〇年代にかけて、内容が一変してしまうほどの大きな転換があったのだろうか。

そのことを確かめるために、実際の資料に当たってみると、幕末期の子どもの本と明治一〇年代あたりのそれには、ほとんどといっていいほど違いは認められない。江戸中期から後期へと脈々と続いた草双紙の流れは、明治に入っても、決して途切れることなく続いていった。ただ続いただけではなく、西洋の新染料・新挿絵技術による新たな装いのもとに、一種独特な輝きを放つ絵本として、当時の子どもたちの心を魅了していた。江戸の草双紙と明治の草双紙、その間に、新たな技術革新による造本上の変化は認められても、内容上の断絶は認められない。

同じことは、明治二〇年代以降の児童書についてもいえるだろう。たとえば、日本の絵本の先駆けとなった博文館の「お伽画帖」や金井信生堂の「教育絵本」の多くは、「桃太郎」「浦島太郎」などの昔話か、「八幡太郎」や「俵藤太」などの英雄もの、あるいは「曾我兄弟」などの仇討ちものがしめる。大正・昭和期に至ってもそれは変わらない。大衆児童文学の先駆けとなった立川文庫の内容をみても、少年少女の圧倒的な支持をえた『少年倶楽部』や『少女倶楽部』の内容をみても、相変わらず「宮本武蔵」「水戸黄門」「大久保彦左衛門」「頼光山人」「鉢かつぎ姫」といった、幕末の絵双紙と同じタイトルの書物や連載ものがならぶ。その雑誌を発行する「講談社」という名前そのものからして、すでに江戸の伝統話芸の継承を示唆するものとなっている。こうした事実を目を閉ざして、「近代」の要素のみで児童書の歴史を組み立ててきたこれまでの方法は、はたして正しい方法であったといえるのだろうか。

「近世」と「近代」の間に一線を画して、双方をあたかも異質のもののように扱ってきたのは、実際の歴史の流れにもとづくというよりは、むしろ、「近世」と「近代」に分断された学問世界に属する人たちの都合によるところが大きかったのでないか。少なくとも、実際の資料の上から児童書の歴史をふり返って見た場合、明治維新の前後を切り離して考えなければならぬ必然性はどうしてもわたしには見あたらないのである。

やはりここは、実際の資料を第一として、それをもとに、再度、児童書の歴史を組み立て直してみる必要がある。そのような考えに立って、明治維新以降の児童書の流れをふり返ってみるならば、それは、江戸以来脈々と続く物語や昔話の流れに、西洋からもたらされた物語や思想が加わって、新たな児童書の流れが形成されていく一連の過程と捉えることができるだろう。あくまでも、それは伝統的な基礎の上に築かれた新しい流れであって、西洋の物語や思想のみがその流れを形づくる唯一の要因となっていたわけではない。「近世」と「近代」を切り離すのではなくて、双方連続した流れと捉え、その上で、維新以降流入してくる西洋の書物の影響を受け、日本の児童書の流れが大きく変わっていく状況を確認していく、それこそが「近代」の児童書・児童文学の歴史をふり返る正当な方法ということになるのではないだろうか。

そのためには、まず、原点にさかのぼって江戸の児童書の流れを確認するという作業がどうしても欠かせないものとなる。それによつてはじめて、江戸以来脈々と続く物語や昔話に、西洋からもたらされた物語や思想が加わって、新たな児童文学・児童書の流れが形成されていく一連の経過が見えてくる。そして、それこそが、真の意味での日本児童文学史・日本児童書史ということになる。そのような考えに立って、「近世」から「近代」へと継承され、発展をとげていった日本の児童書の流れを

再度捉え直してみようというのが本書の大きな目的である。

本書執筆の直接的動機はそういうことにあるが、それとは別に、もう一つ、わたしがこれを書くことと思つた理由がある。それは、児童書における表紙や装幀や挿絵に関わる問題である。普通、児童書を手にした場合、わたしたちは、まず、造本の妙や表紙の美しさ、挿絵の面白さといった、視覚面における創意や工夫に目を向ける。そこに興味を惹かれるからこそ、多くの人は、書店の児童書コーナーや、挿絵の展覧会などに足繁く通う。大人でさえそうなのだから、子どもたちはなおさらのことだろう。不思議の国のアリスではないけれど、「絵も会話もない本なんて一体なんの役にたつのでしょうか」という気持ちになるのは当然である。それが、ある一定年齢までの子どもたちの書物に対する偽らざる感想ではないだろうか。要するに、児童書は、その装幀・挿絵を切り離しては、完全な児童書とはいえないということになる。

そうである以上、児童書史も、装幀や造本、表紙絵・挿絵をも含めた書物全体の歴史を扱って、はじめて完全な児童書史となる。ところが、どういうわけか、そうした視覚面、造形面を含めた、総合的な書物としての歴史をふりかえつた児童書史というものが案外少ないのである。管見するかぎり、瀬田貞二氏が一九八二年に発表した『落穂ひろい』（福音館書店）ぐらいではないだろうか。あるいは、「近世」「近代」の枠内に限定した

ものをも含めるならば、中野三敏氏らの『近世子どもの絵本集』(岩波書店)や、上窪一郎氏の『日本の童画家たち』(くもん選書)、さらには、鳥越信氏の『小さな絵本美術館』(ミネルヴァ書房)などもあげなければならない。確かに、近年そうした、書物の挿絵や装幀面に関心を向けた著作が散見されるようになったが、それでも、決して十分とはいえないと思う。なにしろ、日本には、四〇〇年にもおよぶ膨大な児童書の蓄積があるのである。その変遷をたどるのに、一書や二書をもって十分ということには決してならない。

この方面ではかなり日本の先を行くイギリス児童文学界などの動向を見ても、絵入り刊本の歴史は、人々の最も関心の高い分野の一つとなっていて、それをふり返る歴史書が数多く出版されている。日本の場合は、歴史そのものは決して見劣りしないのだが、それを通覧できる書物があまりにも少ない。それが四〇〇年の伝統を誇る日本の児童書史を取り巻く現状かと思うと、いかにもさびしいという感じがいなめない。そんな気持ちから、あえてわたしも、瀬田氏や中野氏、上氏、鳥越氏ら優れた先人たちのあとを追うことにした。それがこの本を書こうと思いついた第二の理由である。

もちろん至らなさは十分承知の上ということになる。筆者は、元来、日欧の比較文学・比較文化を専門に研究するもので、とくに児童文学・児童書に造詣が深いというわけではない。ただ、

日本における西洋文学の受容に関する資料を二十数年間にわたって調査・収集してきた関係から、児童書に関する資料も数千点といった数のものを目にしてきた。なかには、これまでほとんど取り上げられたことのない貴重な資料も数多く含まれていて、今回のこの本を執筆するに当たっては、それらの資料でできるかぎり取り入れながら、児童書の歴史を組み立ててみることにした。つまり、本書は、これまで児童書史に取りあげられたことのない数多くのオリジナル資料をもとに児童書の通史を編もうとしたものであり、その点が、唯一、取り柄といえ取り柄ということになるかもしれない。

ともあれ、この本は、筆者が長年にわたり調査・収集してきた資料をもとに、それを優れた先人たちの著作と照合しながら分類整理し、新たな児童書の歴史の流れを再構築しようとしたものである。その際に、各項の項目立てを行って、索引による内容の確認ができるように工夫をほどこした。本書の副題を「絵本・挿絵大事典」としたのはそのためである。

「事典」と銘打つ以上、できうるかぎり歴史上の重要事項を取り込むことに努めたつもりではあるが、何分、問題が多岐にわたるだけに、欠落した事柄も少なくないものと思われる。錯誤や思い違いも多々含まれているにちがいない。大方のご叱正を賜りながら、今後、さらなる内容の充実に努めていくことができれば幸いと考えている。